

曾田 めぐみ

河鍋暁斎筆「地獄極楽めぐり図」再考
—幕末明治の表象と追善供養のかたち—

本論文は近年特に注目を集め、多彩な作例を残している河鍋暁斎が描く「地獄極楽めぐり図」に着目し、全四十図の中から三図に焦点を当て、モチーフの種本や見立て、背景にある追善の意図、さらには明治初期のウイットに富んだ思いをも解き明かしたものである。

本作品は日本橋の商家勝田家の愛娘で十四才で夭折した田鶴の追善供養のために描かれた作品で、一周忌に同家に納められた。臨終から地獄をめぐり極楽往生までの一連の姿があらわされたなかで、第一図「蝶と和鏡」、第二十三図「三代歌川豊国描く歌舞伎役者」、第三十七図「極楽行きの列車」が本作品において象徴的な図様をもつものとして論が進められていく。まず第一図の和鏡にあらわされている二つの家紋と向かい合う二体の天人のモチーフを江戸時代後期における古代宝物の関心から撰述された法隆寺の『御宝物図絵』にある摩耶夫人と天人像に求める。さらに暁斎がそれを手本とする蓋然性をしっかりと指摘した上で、第二図の「田鶴と辞世の句」の円相と表裏の関係にあるとし、戒名の「清鏡院寿式貞讃大姉」の一字「鏡」の意義も踏まえた両図をめぐる論証は説得力に富む。

浄土へむかう途中の第二十三図には歌舞伎役者が大きく描かれている。杏葉菊紋を配した水浅葱色の着物と橘を背景としており、従来は八代目市川團十郎とされてきたが、紋と橘＝市村座から五代目尾上菊五郎に比定し、しかも楽屋姿であるとする。さらに勝田家と菊五郎の鬚筋の関係にも言及し、第一図の天人の顔にも立ち戻り、田鶴と菊五郎の疑似婚礼の意図をも汲み取る。追善という悲しみのなかに婚礼という祝福を盛り込み、親に安堵感を与えようとする暁斎の心意気を見ることが出来る。

最後の第三十七図は一周忌とは別に二年後に加えられた図で、列車にて極楽へ向かうというまさしく文明開化の時期らしい往生図であるが、来迎する菩薩に田鶴を見だし、没後の田鶴の人としての成長と仏へと昇華していく姿とする。列車の表現については暁斎の知識不足とされていた点について瓦版をベースとして装飾を加えたファンタジーな仕上がりとみなし、積極的な評価をあたえている。

モチーフの淵源を見いだす点は美術史の常套手段であるが、本図と暁斎の背景にある浮世絵師、歌舞伎、風俗、近代化を丹念に調べ上げ、すべてが緊密に関連しあっていることを明らかにした点は評価されよう。おそらく河鍋暁斎と勝田家及び田鶴との間柄には画家と檀那との関係を越えた強い愛情があったからこそ、それゆえ本図が見事に構成されていると思われるが、そのことを巧みに証明しているのである。いっそのこと「地獄極楽めぐり図」全図を絵解きして欲しいと思わせる論の展開は刺激的である。論考もさることながら暁斎の魅力を存分に引き出した内容となっている点も付け加えておこう。

以上の理由により、曾田めぐみ氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称えるものとする。